

# 久保田万太郎と関東大震災

——俳句を中心に

藤田祐史

## 1 はじめに

久保田万太郎（一八八九—一九六三）の創作に関東大震災はどのように関わっているのか。本稿では、俳句を中心に万太郎の創作全体における「震災」の意味を明らかにする。また、俳句というジャンルは「震災」とどのように関わり得るのか、万太郎の俳句及びび関東大震災に関連する俳句を対象に考察を深める。

久保田万太郎は俳人、小説家、劇作家として評価されている。

万太郎と「震災」の関係に触れている先行論としては、千葉正昭「役割としての震災・新派——久保田万太郎『春泥』小解」があり、千葉はそのなかで次のように述べている。

万太郎は、日本人が古来から精神的に拠り所としての安らぎを得られる土地や空間や、その空間に含まれる景観、更に

はその場所が孕む歴史性というものに着目していた。そこに広義としての風俗を融化させ、独特の物語世界を捻出した。

この精神的拠り所としての場所から湧き出してくる安堵感や情緒的景観をことごとく粉碎し、消滅させたのが震災であった。

〔中略〕万太郎は、関東大震災が奪い去ったものが、物質的な破壊に留まるものでなく、情緒ある景観から喚起される心性としての安らぎの喪失感を、根深いものとして捉えていた。<sup>①</sup>

万太郎の文学を「震災」との関連で捉えるとき、「情緒的景観」

を奪ったのが「震災」、そしてその「情緒ある景観から喚起される心性としての安らぎ」を失った人々が彼の文学には書かれているという発見である。万太郎と「震災」の関係を扱った論文にはその他に、古郡康人「市井人」「うしろかげ」論——戦後の久保田万太郎や丸山徹「銀座復興」があり、個別の小説や戯曲における「震災」の意味が論じられている。こうした先行論に対し、本稿で

は「震災」が万太郎の創作全体に大きく関わっているという問題意識を共有しながらも、俳句を中心にその関わり方を探る。

順序としては、まず伝記的な事実の確認から始め、俳句、小説、戯曲についての作品論ではなく、作品を横断しての「震災」との関わり方を俯瞰的に捉える。次に万太郎の「震災」俳句について、河東碧梧桐の「震災」俳句と比較しながら、その特徴を抽出する。最後に、万太郎も用いた「震災忌」という季語について検討し、「震災」という厄災に対して俳句はどのように関わり得るのか、本稿全体の問いの答えへと辿りつきたい。

## 2 久保田万太郎の創作における関東大震災

伝記的な事実から確認していこう。

大正十二年（三十五歳）〔略〕八月、かねて構想中だった戯曲『あぶらでり』のはじめの一ト幕だけ書いて、それが『改造』に載つた途端に来たのが、九月一日の関東大震災だった。

両親の一家、および、ぼくたち親子三人は、北三筋町の家を焼けだされた<sup>⑤</sup>。

久保田万太郎は三十五歳の時に、当時の浅草の家を「震災」で失い、それから日暮里へと移り住む。万太郎の伝記的な研究のなかでは芥川龍之介との交流についても触れられることの多い日暮里の時代について、彼は後に「私の一生でのいゝ生活だった。うそのない生活だった。美しい生活だった」<sup>④</sup>と振り返っている。「震災」にあつて家族と共に逃れてきた見知らぬ土地であつたが、そこで充実した時間を思いがけず得た彼は戯曲『大寺学校』（一九二七）、小説

『春泥』（一九二八）など代表作とされる作品をこの地で執筆している。

加えて、万太郎と「震災」に関連しての伝記的事実で押さえておきたいのは、彼が大正七年（三十歳）のときに火事にあつて家を失い、昭和二十年（五十七歳）五月の空襲で再び家を失つているという被災の事実である。本稿では「震災」の話に絞るため他の罹災経験については論じないが<sup>⑥</sup>、万太郎はこのような三度の火による厄災を経験しており、そのことも彼の（特に戦後の）「震災」との関係に影響を与えていく。では、そうした彼の創作における「震災」との関わり方とは具体的にどのようなものであろうか。俳句、小説、戯曲、それから補足的に随筆の順に全体像を見てみよう。

俳句については、次節以降で詳しく触れるが、まずのこされている実際の句と創作年を左に挙げてみる。

秋風や水に落ちたる空の色（一九三三） 「大地震のあ

と駒込のさる方に立退き半月あまりすこす。夏、夢の間に去る」の前置。

一トむかしまへうち語る切子かな（一九三五） 「震災のおもいでとや」の前置。

また九月一日来る秋の蝉（一九三八〜四二二）

震災忌雲群るゝ夜となりにけり（一九三九）

波の音をりをりひびき震災忌<sup>⑥</sup>（一九三九〜四二二）

かまくらの月のひかりや震災忌（一九三九〜四二二）

震災忌向あうて蕎麦啜りけり（一九六〇）

以上、「震災忌」という季語を用いた俳句が四句、また前置きや内容から「震災」との関連が明白な句が三句の計七句が確認でき

る。一読してわかるように、万太郎の俳句において「震災」は直接的に詠まれていない<sup>7)</sup>。俳句の創作時期も一九二三年の句は一句のみであるし、多くは過去を振り返りながら「震災忌」という季語を用いながら詠まれている。その特徴の分析は次節にするとして、次に小説の全体像を見てみる。

小説というジャンルでも、万太郎は「震災」を直接的には書いていない。関連する作品名と概要を提示してみる。

『春泥』（一九二八） 関東大震災の年の師走の東京を舞台に変化する町、人情を書く。

『東海道』（一九三五） 一九三三年の八月三十一日から九月一日にかけての語り手の陰鬱な心情が書かれている。

『うしろかげ』（一九五〇） 「震災」をきっかけに思いがけない人間関係が結ばれていく様子が書かれている。

『鷗外よりも……』（一九五三） 万太郎と重ねられる人物が三度の火の災い（火事、震災、戦災）を語る。関東大震災について短くも避難経路など当時の具体的記述があるのが珍しい。

『火事息子』（一九五六・五七） 短い記述ではあるが当時の焼野原を歩く男が書かれている。「つまり、浅茅ヶ原のむかしに返つたんだ……」<sup>8)</sup>。

関東大震災からしばらく「震災」は小説に見られず、一九二八年の『春泥』以降、作中人物の台詞や設定に意識されはじめる。

一九二三年時の記述は『東海道』（一九三五）を別にすれば、戦後になって『鷗外よりも……』『火事息子』等で回想のかたちで、断片的ではあるが漸く書かれるようになるのであり、その点、先に挙

げた俳句と同様である。なお、その他の小説でも関わり度の合いの差はあれど「震災」後の変化していく東京で生活する人々の心情が書かれており、作品名のみ列挙すると、『月あかり』（一九三三）『町中』（一九三三）『余白』（一九三五）『青葉木菟』（一九三六）『川』（一九四二）『樹蔭』（一九四四）『すゞめいろどき』（一九四八）『市井人』（一九四九）『モデルと作者』（一九五〇）『柴又』（一九五〇）『いきのこり』（一九五二）『三の酉』（一九五五）『鳥、雲に』（一九五六）『むかしの仲間』（一九五七）がそれに当たる。

戯曲では『露深く』（一九二五）が、「震災」後間もない東京を舞台にしている。この戯曲が万太郎唯一の関東大震災を直接題材にした創作であり、作者自身「その時の『記録』である、この作は……といったつて、勿論空想六分の、ほんとのこと四分だが、作者自身、書いて置いてよかつたといまもつて思つてる作品である」と記している<sup>9)</sup>。

戯曲全体の特徴として、小説のように「震災」後を意識して書かれた作品は少なく、逆に「震災」前を舞台とする作品が多い。例えば『通り雨』（一九二六）に対して作者は「震災で焼亡した『浅草』の町々を……その町々の善良な居住者たちをしのごの作の一つである」<sup>10)</sup>と述べている。なお、戯曲では他に、『一周忌』（一九二八）『蛭』（一九三五）、『東京のゆくへ』（一九三八、瀬戸英一原作）『鷗』（一九四九）『火事息子』（一九六一）『遅ぎくら』（一九六二）でも若干ではあるが「震災」に言及している。水上瀧太郎の『銀座復興』の劇化（一九四四）も有名である。

万太郎の創作全体における「震災」の特徴をまとめてみると、彼の小説における「震災」は当時の記録ではなく、「震災」後を生

きる人々に関心の中心があることがわかる。このことは先行研究が個別の作品論において明らかにしてきた通りである。一方、戯曲では「震災」前の東京を舞台に設定し、失われた町の人々を書くこととする意図が見られる。また、創作全体における「震災」の扱いとして、後年に空襲を体験してからは、「震災」と「戦災」が同じ火の記憶として、加えて「震災」「戦災」以前の自身の家の火事の記憶も重ねて並列的に語られる点も特徴として挙げておきたい。

なお、俳句、小説、戯曲のほかに随筆でも『二度あることは三度目のこと』（一九四六）等に「震災」の話を見出すことができる。なかでも『雷門以北』（一九二七）では「古い浅草」と「新しい浅草」が対比され、「新しい浅草」では「震災」の二字が不必要なほどの世相の変化に作者は驚いている<sup>(1)</sup>。その他、随筆では『枯野』（一九二四）、『ぼくが三十五のとき』（一九五八）には「震災」直後の万太郎の具体的な状況及び行動が書かれている。

ここまで概観ではあるが、万太郎の創作全体と「震災」の関係についてその全体像を提示してきた。次節ではそうした多様な「震災」との関わりの中だけでも俳句に焦点を当て、彼の俳句と「震災」との関係について考察を深めてみたい。

### 3 久保田万太郎の俳句と関東大震災

#### ——河東碧梧桐の「震災」俳句と比較して

久保田万太郎の俳句と「震災」の関わり方を探るに当たり、比較として河東碧梧桐（一八七三、一九三七）の「震災」俳句から考えてみたい。碧梧桐は高浜虚子と同様に正岡子規の弟子かつ友人で

あった人物で、明治後半の一時期は虚子以上に俳句の改革の中心に位置していた。では、彼の「震災」俳句とはどのようなものか。「震災雑詠」<sup>(2)</sup>と題された十八句には次のような句が並んでいる。

松葉牡丹のむき出しな茎がよれて倒れて  
ずり落ちた瓦ふみ平らす人ら

両手に掲げたバケツの空らん

山蟻があるく壁土と掃く

焼跡を行く翻へる干し物の白布

塀の倒れた家の柚子の木桑の木

引用は十八句のうち六句である。五・七・五の季語付きの俳句ではなく碧梧桐独自の律をとりながらも、題材や写生的な描写は子規以降の俳句の特徴を備え、流通する「震災」イメージとは異なる情景を表現している。ところで、当時の俳壇の中心であった「ホトトギス」派との比較ではなく、なぜ碧梧桐の句を比較の対象として検討するのか。それは単純に、高浜虚子を中心とする「ホトトギス」派の俳人は虚子が「震災」そのものを詠むことに難を示したこともあり、創作に消極的であったためである。「ホトトギス」派では例外的に、当時の東京市長永田青嵐（一八七六、一九四三）がまとまった作品を残しているが（焼けて尚芽ぐむ力や棕櫚の露<sup>(3)</sup>等）、全体に「震災」そのものを俳句で捉えようとした俳人は少数派であった<sup>(4)</sup>。

碧梧桐の「震災」俳句の特徴に戻ると、彼の句は定型から離れながらも、詠み方は目で見たものをそのまま俳句にする素朴な意味での写生の方法で貫かれており、後で挙げる万太郎の句と対照的である。碧梧桐の「震災」俳句は、時に季語も使われているが季は

中心ではなく、経験している事実や小さなものに重きが置かれ、細部の描写と韻律の工夫によって眼前の現実を捉えている。例えば「松葉牡丹のむき出しな茎がよれて倒れて」の句は、碧梧桐が同時期に書いた「大震災日記」における「松葉牡丹の真紅に燃える花が、足もとに咲きかかつてゐる」<sup>(14)</sup>という散文と比較すると、俳句としての効果がわかる<sup>(15)</sup>。それでは、こうした碧梧桐の句と比較して万太郎の「震災」俳句にはどのような特徴があるだろうか。

次の引用は現代の俳人、小澤實と高柳克弘との対談（「万太郎を通じて出会う俳句」）である。

「万太郎の「なつじほの音たかく計のいたりけり」を巡って」

小澤 「略」万太郎は、虚子、秋桜子、湘子の間合いとは違う。秋桜子は万太郎とともに句会を楽しんでいて、大変近かったけれども、やはり表現の方向が違います。

高柳 写生をするという方向ですね。

小澤 そうです。季語は実の言葉なんです。それに対して、万太郎の「なつじほ」は、「音たかく」という語を導き出すための序詞のような言葉になっていて、虚の言葉なんです。もちろん、季語がこの句の中心にはならない。そういう季語の使い方をしている人は、近代の虚子系の俳句では見出すことができなと思います。

高柳 写生でもないし、「ホトトギス」のように季題中心でもないというところが万太郎独特です。<sup>(16)</sup>

この対談では、万太郎の俳句全般の特徴が話されており、彼の句は季題中心ではないし（この点は碧梧桐と同様である）、写生中心でもない（よって「ホトトギス」派とも碧梧桐とも異なる）ことが確認さ

れている。季語ではなく季題ということばの使用は「ホトトギス」派の俳人に多く見られるが、その題が持っている歴史的な意味にふさわしい俳句を詠もうという創作姿勢が背景にある。一方、この対話でもう一つ注目したいのは「虚」ということばであり、次にこの「虚」を意識しながら万太郎の「震災」俳句を鑑賞してみよう。

秋風や水に落ちたる空の色 （一九二三） 「大地震のあと駒込のさる方に立退き半月あまりすこす。夏、夢の間に去る」の前置。

既に前節でも挙げたこの句では、季語が「虚」のことばとして用いられている。秋風が「実」としてあつて、それに見合った「水に落ちたる空」を詠むのではなく、現実にある「水に落ちたる空の色」を表現するためにフィクションとして「秋風」が用意されるという趣向である。一方、この句は秋風に気づき、それから水に落ちている空の色が秋の空の色だと気づいた句とも読み得る。その場合も、「震災」を伝える前置と、色のない風、そして水に映る空の色という儚いもの（限りなく「虚」に近い「実」）が取り合わされることになり、大地震からその句に至るまでの時間の不確かさが表現される。どちらにしても万太郎の「震災」俳句には、碧梧桐の句のように「震災」そのものを伝える意図は見出せない。それでは万太郎の俳句にとつての「震災」とは何だろうか。

ここで万太郎の俳句における「震災」との関わり方を理解するに当たり、彼の小説における「震災」の意味と類比させてみたい。次の引用は、小説「うしろかげ」（一九五〇）の冒頭、「何がうそで何がほんとの寒さかな」という句が詠まれる場面である。この句を詠む登場人物は関東大震災前には酒屋を営み、今は焼けあとに「一

けんの、うそにもきまつた」<sup>(7)</sup> おでん屋を開いている男で、俳句はその女房との次のようなやりとりのうちに彼の口に上る。その冒頭の場面を見てみる。

——をかしなもんだナ。……こんなものなんだナ、世の中つてものは……〔略〕

——何が？……

と、女房は、やつがしらの皮を剥きながら聞きとがめました。

——何がつてさ、お前、苦しまぎれにはじめた喰ひものや商売が、さ。〔略〕

——でも、あたし、まさかおでんやおかみさんにならうとは思はなかつたわ。……うそからでたまことつていふんでせうね、これ？

——でも、七段目のおかるはいつたゾ。……まことからでた、みんな、うそ、うそ、とね……

——おつ母さんと坊やが帰つて来たら、驚くだらうと思つてね、さぞ……

——だから、帰つて来たら、べつに住はせるさ。

——そんなことできる？……

——いま、すぐにはできない。……すぐにはできないが、あと半年もしたらできる……

——ほんと？……

——何がうそで、なにがほんとの、寒さかな……

ヒヨイと、そのとき、かうした句がわたくしの口に上りました。<sup>(8)</sup>

『うしろかげ』において「なにがうそでなにがほんとの寒さかな」

という俳句が詠まれる右記の場面には、万太郎の創作における「震災」の意味が凝集されている。この俳句をつくる人物は、「震災」前の生活が夢のようだと云っているのではなく、今おでん屋を営んで生きている自分たちの生活が、まるで「うそ」のようだと感じている<sup>(9)</sup>。その感覚は、「虚実不分明の感覚」とでも名付け得ようか。そして、こうした「虚」と「実」がわからなくなる感覚をつくるのが、万太郎の創作における「震災」なのではないか。このことを意識して、次に「震災忌」という季語が用いられた「震災忌向あうて蕎麦啜りけり」の句を鑑賞してみる。

この句の場合、「震災忌」という季語が「虚」で、向き合つて蕎麦を啜っている光景が「実」だろうか。そのように読むこともできるが、『うしろかげ』に書かれた「虚」と「実」の感覚を思い出し、「向あうて蕎麦啜りけり」の現在に「虚」の感覚を読み取ってみる。誰かと向き合つて蕎麦を啜っている。蕎麦は「震災」前と何ら変わらない日常の食べ物である。しかし、その不変のように見える日常こそが「うそ」のように感じられる、というのが万太郎の「震災」後の感覚（『うしろかげ』や同句が書かれたのが戦後であることを思うと「震災」後の感覚でもある）であった。ここには、先行論が万太郎の小説に対して強調してきた「震災」後の変化以上に見せかけの不変と、それゆえの不安が強調されている。

このように万太郎は「実」の一辺倒になりがちな「震災」俳句に「虚」の感覚を与えている。写生の俳句が「震災」そのものを伝えようとしたのに対し、万太郎の「震災」俳句は広い意味でのフィクションを導入しており、それらの句は「震災」と「虚」の関係の是非を問う早期の事例としても見出し得るのである<sup>(10)</sup>。

そして、万太郎も用いた「震災忌」ということば自体はその後、「ホトトギス」派も含めて多くの俳人たちが使用する季語として定着していく。次節では万太郎を含む俳句というジャンル共通の「震災」との関係を明らかにするために、「震災忌」を用いた俳句を対象にその関係を探ってみた。

#### 4 「震災忌」という作法

左の引用は、『図説大俳句歳時記』で「震災忌」<sup>(21)</sup>と引いて出てくる例句十四句のうち、前半の七句である。

震災記念日 仲 震災忌 防災の日

解説 (略)

考証 『纂修歳時記』(大正一五)に「黙禱に響く午砲や震災忌 泉園」の句を所出。

江東にまた帰り住み震災忌

大橋越央子

「市谷台」

万巻の書のひそかなり震災忌

中村草田男

「長子」

震災忌はたち余りの道路工

石塚友二

「光塵」

ぬれそばちささぐる花も震災忌

武石佐海

「雲母」

わが知れる阿鼻叫喚や震災忌

京極杞陽

「但馬住」

震災忌ゆきさき百日紅の飛び火

伊丹三樹彦

「青玄」

家ぬちをやんまが抜ける震災忌

皆川白陀

(鶴)<sup>(22)</sup>

「震災」直後には作句に否定的であった「ホトトギス」派からも

「震災忌」という季語に託して多様な俳句がつくられている<sup>(23)</sup>。なかでも目立つのは、京極杞陽が「わが知れる阿鼻叫喚や震災忌」と詠むように、「震災忌」に適した「実」の情景・心情を取り合わせ

た句である。

ここで改めて万太郎の「震災忌」の句を思い出すと、「震災忌向あうて蕎麦啜りけり」「震災忌雲群る、夜となりけり」「波の音をりをりひびき震災忌」「かまくらの月のひかりや震災忌」の四句であった。これらは「震災忌」という季語から連想される情景・心情を付けるより、敢えて離れた日常的な景を付けている点が特徴的であるが、「震災忌」という季語を使用して「震災」と関わろうとしている点では「ホトトギス」派の俳人たちと同様である。それでは、「震災忌」という季語に託して詠み連ねていく無数の俳句は「震災」とどのように関わり得るのか。

「震災忌」は季語として定着し、今でも毎年多くの俳句がつくられている。例えば、雑誌『週刊金曜日』が二〇一八年に「震災忌」を兼題として募集したところ、一五四句が集まり、それらの句は今でもインターネット上で閲覧可能である<sup>(24)</sup>。注目すべきはその数で、小規模の雑誌の応募でも百句以上が「震災忌」に託して集まってくる。このことから、各結社や多数の句会及び新聞雑誌の投句欄の存在を想像するなら、大変な数の関東大震災関連の句が今も年々つくられていることになる。「震災忌」という五音に付ける十二音のことはを俳句作家たちはさがしつづけているわけで、こうした営為によつて「震災」は一九二三年九月一日という直線的な時間の一点に起きた出来事であると同時に巡るもの、「行きかふ」出来事へと変じていく。

「震災」そのものを俳句に詠むことには、細部への注目や即興性という特徴による鮮烈な「震災」イメージの保存等、様々な利点が挙げられる。しかし、その場合であっても俳句というジャンルと

「震災」の独自の関係を求めるならば、季語が果たす役割は大きい。季語の存在によって、どのような俳句であっても先に詠まれた句、後に詠まれる句と連環するのであり、殊に「震災忌」のような季語の定着は、何千何万の「震災俳句」の連なりをつくり得るのである。

## 5 おわりに

ここまで久保田万太郎の創作全体と「震災」との関わりを概観を捉え、彼の「震災」俳句の特徴、また、俳句というジャンル自体が「震災」とどのように関わり得るのか、「震災忌」という季語に注目しながら考察してきた。

万太郎の創作と「震災」の関係からまとめると、その創作において「震災」は直接的に扱われる素材ではなかったが、多くの作品で過去と今、「実」と「虚」の境界としての意味を付与されていた。ジャンル別に見ると、小説にて「震災」後を、戯曲にて「震災」前を書くことによって、「震災」の心理的な切断面が強調されていた。また、その境を越えた今の時間が「虚」であるという感覚は彼の創作に通底しており、俳句の鑑賞にも解釈の一つとして有効であることを確認した。

また、俳句というジャンルは「震災」とどのように関わり得るのかについては前節で提起したように、「震災忌」という季語の定着こそが俳句と「震災」の関わりを継続的にする上で欠かせない要素となっていることを確認した。「震災忌」という季語が歳時記に掲載されることは、俳句が「震災」を季として受け容れることであり、

厄災に対しての個々の俳人によることばさがしの場(座)ができること、向き合う時が生じることもある。俳句は先行する句を意識して類想を避けることを重んじるため、作句する各々は自分なりに大いなる厄災に対することばを探索することになる。その際、自らの生活や現実に見たものだけでなく、「虚」を織り交ぜながら「震災忌」に付くことばを探し、その「虚」を含むことばと「震災忌」を結ぶ久保田万太郎の姿勢は、現在と未来の「震災」俳句を考える際にも思い出す価値があるのではないか。

## 注

- 1 千葉正昭「役割としての震災・新派——久保田万太郎『春泥』小解」『大正文学4』一九九二年一〇月。後に『記憶の風景 久保田万太郎の小説』(武蔵野書房、一九九八年)に「素材としての震災・新派」の題目で収載、引用は『記憶の風景』一五三頁。
  - 2 古郡康人「市井人」『うしろかげ』論——戦後の久保田万太郎』『三田文学の系譜』中村三代司・松村友視編、三弥井書店、一九八八年。
  - 3 丸山徹「銀座復興」『三田学会雑誌』一〇七巻二号、二〇一四年七月。
  - 4 久保田万太郎「明治二十二年——昭和三十三年……」(一九五七)『久保田万太郎全集 第十五巻』中央公論社、一九七六年、六五七頁。
  - 5 「無言」(一九四三)前掲全集第十一巻、一九七五年、四〇三頁。
- 久保田万太郎の文学における空襲については、石川巧「久保田万太郎における〈空襲〉」(『立教大学大学院日本文学論叢』一四号、二〇一四年九月)に詳しい。



6 「波の音をりをりひびき震災忌」と「かまぐらの月のひかりや震災忌」の句は、初出の「三人冗語（二）」（『俳句研究』一九三九年一〇月）の時点では、「波音をりをりひびき震災忌」「鎌倉の月のひかりや震災忌」。なお、本稿における万太郎の俳句はすべて『久保田万太郎全句集』（中央公論社、一九七一年）による。

7 震災に対しては「あさがほやはやくもひびく哨戒機」「桜の花や空襲警報下」、その他の厄災に対しても万太郎は「焼けあとのまだそのままに師走かな」「秋出水、牛、馬、死んでながれけり」のような句を詠んでいる。

8 前掲全集第四巻、一九七五年、三四九頁。

9 「好学社版『久保田万太郎全集』後記」前掲全集第十五巻、三二九頁。

10 前掲全集第十五巻、三三〇頁。『通り雨』に限らず、「震災」に言及がなくとも「震災」を意識している作品が多いことは万太郎自身が述べており（「町々……人々……」全集第十巻、一九七五年、一四八頁）、そうした明記されていない影響関係を読み解くことは今後の課題である。

11 「雷門以北」前掲全集第十巻、三二二頁。

12 『河東碧梧桐全句集』栗田靖編、蝸牛社、一九九二年、四〇七・四〇八頁。

13 『永田青嵐句集』新樹社、一九五八年。「震災雑詠」（一九二四）として発表された。なお、碧梧桐と青嵐のほかにまとめた数の「震災」俳句をのこした人物としてまず北原白秋（一八八五・一九四二）の名が挙がる。白秋は「震後」と題して三十八句を俳句の結社誌『石楠』（一九四二年一月）の巻頭に発表。「なみ強し一命虫の声に通ず」か

らはじまる作品群は質的にも高い。北原白秋『竹林清興』木俣修編、靖文社、一九四七年に収載。その他、「震災」の句をのこした人物として、巖谷小波（一八七〇・一九三三）の名も挙げておく。小波の俳句は「バラックや涼しう風の吹き通す」等が、『帝都復興叢書 第四輯 詩集市民の歌へる』（東京市編纂、帝都復興叢書刊行会、一九二四年）の巻頭に収載。同集の小波による「序に代へて」には「昨年十一月下旬に、帝都復興の精神をよめる歌謡の募集を発表したところ、それが僅か一ヶ月といふ短い期間であつたにもかゝらず、三百有余名の多数の方々から、夫々雄篇を寄せられ、其中から選に入つたものをば、今日このやうに思つたよりも大きい書物として発表するに至つたのであります」（三頁）とある。同集には俳句以外にも公募で集められた詩、和歌、川柳、童謡、民謡が収められている。

14 「大震災日記」『河東碧梧桐全集第十二巻』文藝書房、二〇〇七年、二四四頁。

15 例えば、石川九楊はこの俳句について「むきだしな茎」の「な」に「むき出し」を曝け出す」効果があること、「よれて倒れて」の後に「潰れて」などの次に展開する気配を準備しながら終わっている」点を指摘している。石川九楊『河東碧梧桐——表現の永続革命』文藝春秋、二〇一九年、二九四頁を参考。

16 『三田文学』二〇一六年五月、一四九頁。

17 前掲全集第四巻、八七頁。

18 同上。

19 同小説には「震災なんてものがほんとにあつたのだらうか」（同上、八八頁）という登場人物の感慨も書かれている。

20 万太郎の「震災」俳句に「虚」が活かされていることは、安里恒佑

「関東大震災以後の季語と表象の変遷——「震災忌」を中心に」(修士論文(法政大学)、二〇一八年三月)でも「空想」がデイトールに普遍性を与える方法」(五一頁)として指摘されている。

21 「震災忌」については先行研究として、安里同上論文がある。同論文から、「震災忌」という季語が昭和初期から歳時記に採用され、早い時期に俳人の間で定着した経緯がわかる。

22 『図説俳句大歳時記 秋』角川書店、一九七三年。

23 「死者」の命日に、関東大震災以後を生き延び、現在の生活を詠むという行為は、虚子にとって雑詠欄のあり方で許容しているのであった」安里前掲論文、五一頁。

24 <http://www.kinyobi.co.jp/blog/?p=4255> (二〇二〇年八月一日閲覧)

## 付記

本稿は第六一回原爆文学研究会(二〇二〇年八月八日)におけるワークショップ「(震災)」と俳句」での発表を基にしている。研究会では様々な貴重な意見をいただき、感謝している。殊に本誌収録の中原豊さんのコメントにもあった近世までの地震を詠んだ俳句と、久保田万太郎の俳句との連続性についての指摘からは今後の研究のための示唆を得た。本稿では万太郎の創作と関東大震災の関係について、その後に短く俳句というジャンルと「震災」の関係を探ったが、今後は近世の俳諧を含む俳句と地震、さらには広く俳句と厄災の関わりについて考えることを課題としたい。